



BOTSUONのメンバー

BOTSUON

学生

地域貢献事業

第12回

外国人集住都市の豊橋市。ここに暮らす外国人児童、生徒の学習支援に取り組んでいるのが「BOTSUON」だ。毎週水曜の夕方から2時間、市内の南陽地区市民館で大学生たちが塾を開校する。

「この国に来た子に、不平等と不自由

さを感じさせないというのが一つ大きな目的、活動の意義だと思っています」と、副代表で文学部3年の村井亮哉さんは話す。SDGs(持続可能な開発目標)が掲げる「質の高い教育をみんなに」に関わる活動だ。

生徒の国籍は、タイやコロンビア、フィリピンなど複数の国にわたるが、特に苦手とする教科が算数、数学だと言っ。日本人にとって、なじみ深い九九の暗唱もハードルは

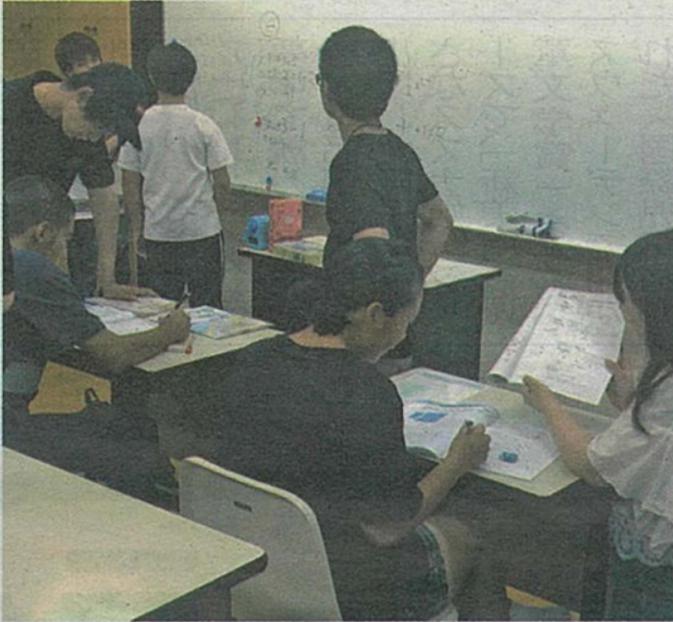
高い。加えて、日本語で書かれた問題を理解する国語的な要素もあり、漢字の読み方や意味を説明するといったサポートを大学生が行つことで、ようやく算数の問題に向き合つことができる。さらに意識するのは滑舌。「会話をするときは、滑舌よくゆっくり話すようにしています。日本人と外国人は滑舌が違つので、

難しい部分があるけれど、教えることで日本語がきれいに発音できるようになってくれたら、うれしいですね」とメンバー。今年度から、IT企業の協力を得てタブレットを使った自宅学習も始めた。「日本で快適に不自由なく暮らしてほしい」と、生活に不可欠な敬語の使い方をまとめた動画を視聴してもら

る。学生自ら作った動画は、お笑い芸人の動画を参考にしつつ、身ぶり手ぶりを使い、時に笑いを交えながら飽きない工夫を随所に施す。

活動のモチベーションはさまざまだが、村井さんは教員を目指しており、学習支援を通じて外国籍の子どもたちとの関わり方を学ぶ。「問題文を理解するのも難しいので、かみくだいて説明する必要がある。この伝える力は教員になっても役に立つ

と思います」と話す。2018年から続く団体も、新型コロナウイルス感染症の影響で一時はメンバーが3人にまで減った。「人数が多いほど支援できる子も増えるので、団体の規模をどんどん大きくしていきたい」と意気込む。いずれは帰国するだろう子どもたちに、「ちよつとでも日本を好きになってほしい」とメンバーは願っ。(飯塚雪) ※協力・愛知大学



NPO法人ABT豊橋ブラジル協会との活動の様子

外国人児童、生徒の学習支援